

平成29年度 第2回企画展 (7月22日(土)～10月22日(日))

# じゅもん ちょうざ 「初代寿門&四代長三」

## せんちゃき ～煎茶器とともに生きた名工～

常滑で煎茶器の一つ「急須」が生産されるようになるのは、江戸時代後期の文化文政の頃と考えられています。残念ながら、その当時に作られた急須は残っていませんが、当時活躍した名工の指導を受けた初代杉江寿門や四代伊奈長三の作品をみることができます。

初代杉江寿門(寿門堂)(1828? - 1897)は通称を「安平(保平)」と呼ばれており、近代土管を考案した鯉江方寿の父、鯉江方救のロクロ職人としてその技を磨きました。江戸時代につくられた初代寿門の急須は残念ながら残っていません。しかし、常滑美術研究所で技術指導に当たった寺内信一の急須スケッチ集には嘉永から安政年間に作られた初代寿門の急須が描かれています。このことから、20代の頃には中国式の急須やロクロによる技巧的な急須が存在し、完成度の高い急須が制作されたと考えられます。また、安政元年(1854)に朱泥焼の製法を完成させた一人としても知られており、土や焼成技術の研究など幅広く活躍していたと考えられます。

四代伊奈長三(1841 - 1924)は通称を「長三郎」と呼ばれ、三代伊奈長三の長男です。その作陶技術は二代長三から指導を受けており、二代が見出した半田市板山の白泥土を用いて藻掛けや火櫓を巧みに操り、雅味のある作品を多く手掛けています。幕末期に祖父二代長三、父三代長三が相次いで亡くなると、鯉江方寿高司父子によって急須制作の技術指導を受けました。

明治11年、鯉江家が中国宜興の急須制作技法を学ばせるため、熱田で逗留中であった中国の文人と言われる金士恒(生没不明)を常滑に招聘し、初代寿門や四代長三らに指導がおこなわれました。指導した期間はわずか半年でしたが、その影響力は大きかったと考えられます。

その証拠として、今回の展示で明らかとなったのは、二人の作品は明治10年代以降になると、点数も豊富に残されるようになります。おそらく常滑の急須の価値が高まり、当時の文人や富裕層に珍重されるようになったためと考えられます。



四代 伊奈長三



四代 伊奈長三作  
烏泥菊型後手急須



初代 杉江寿門作  
施釉急須 銘「朝朝明」



初代 杉江寿門